

我が水彩畫の歴史

本郷曙町 晩 秀 生

余が始めて繪筆を動かしたるは三十五年の初め頃なりき、當時我友人にて丹青に巧なるものあり其人余に語つて曰く、色料を以て寫生するは寫眞と異りて、天然色を以て天然物を畫き得べく、且精神の觀察力を増さしむ故に、共に研究しては如何と、是余をして水彩畫を習はしむる動機なりき、此所に於てか余は直ちに十二色入繪具籍を求め、先の友人を師とも思ひて水彩畫を習ひ始めたり。然れども夫より約一年間は水彩畫に就て何の知る處もあざりき。其當時描きし畫の陰影には何色にも必ず「セピア」を用びたるなり、是は余が曾て動物學の講義中に「烏賊の有する黒汁よりは「セピア」なる色料を得べく、該色は稍褐色を有する黒色にして、陰影用として使用せらる」とありけるを早呑込をして斯くはせるなりき。

此時はじめて陰影は必ずしも「セピア」のみにあらざることを知ると同時に、曩の觀察の不充分なりしを恥ぢぬ。其年の暑中休暇は種々なる水彩畫臨畫帖並びに書類を求めて水彩畫三昧に日を送たり。又其年秋よりは色鉛筆畫法を修めぬ、翌廿七年の春よりは水彩戶外寫生を爲さんと心の類に起り、日曜日待遠しく思はれぬ。此夏水彩畫階梯を購ひ消夏の友とせり。其暑中休暇には越後長岡市の知人の許に遊びて、水彩繪具を持ち其近傍の寫生を試みぬ、其時の作は以前のものよりは稍進歩せしと自ら思へり、こは決して自畫自讚にあらず。暑中休暇終ると共に余は東京に歸れり、而して休日には多く戶外の寫生に出掛けぬ。翌年四月余は或醫學校に入る事となり、隨て多忙の身となり繪に遊ぶの時間は非常に少なくなれり。其夏青梅地方に寫生旅行を爲し、山水自然の姿に接して多少得る所ありき。次で同志の親友と團結して共に繪畫を研究し、時を期して製作品を集め綴りて他日の參考となし、或は自筆繪端書の交換をなして互に樂しみつゝあり。而して余は其の修めつ

ある學問のうちに顯微鏡の實見ある毎に、繪畫を學びしために鏡面に現るは、微細なる虫迄も模寫するを得るなり。こは繪畫のために觀察力を増せし結果なるべし。余の水彩畫歴史は以上の如し。

自筆繪葉書 「下」

先 美

おやこれは珍らしい君何うして歸りましたと聞いたら、神經衰弱で暑中休暇のまゝ上京しません、畫などやつて居りや面白いてしようと言つた。そうてす神經衰弱の方になど一層面白いてす、やつて御覽なさいい、娛樂ですとすゝめたら、うまく行くか行かないかわからないがやつて見ませうつて別れた、それは去年の初秋の夕てあつた。昨日僕の處へ東京から一枚の葉書が來た、それは彼れの自筆繪葉書で、君の御蔭で僕の病氣も非常によい、畫も熱心にやつて居ると書いてあつた。

お 小 言 孤 崖

「君のように畫ばかりやつても困る」とは何度聞いた忠告だらう。或時はなるほどと思つて殊勝にも机に向つて書を繙いたが、歴史の挿圖や地理の挿圖ヤハリ畫に限るナアとは獨言。